

旦那様、どうぞ王女様とお幸せに！

転生妻は離婚して自由気ままに生きようと思います



オパール

元王女付きのメイド。

マルセロ

ルートヴィヒの側近。

カヤ

クラリスの
幼い頃からの
専属メイド。

ルートヴィヒ・ レーンクヴィスト

第二魔獣騎士団の団長。
寡黙で必要以上のことを話さない。
ある理由で魔獣の違法商団を
執拗に追っている。

ソフィア・ セーデルホルム

王女で「国民の妹」と
呼ばれている。
第二魔獣騎士団に属する。
明るい性格で人気者。

アロルド・ エードルンド

第一魔獣騎士団長。
一見いい加減なようで、
実は有能な指揮官。
クラリスを気にかけている。

クラリス・ レーンクヴィスト

気が弱く、口数が少なかったが、
前世の記憶を取り戻した後は
積極性が出て行動も活発になる。
争い事を好まず、
のんびり暮らしたいと願う。

ドラちゃん

第一魔獣騎士団の
赤ちゃんドラゴン。
クラリスに懐く。

目次

旦那様、どうぞ王女様とお幸せに！
転生妻は離婚して自由気ままに生きようと思います

番外編 前を向いて（アロルド side）

旦那様、どうぞ王女様とお幸せに！

転生妻は離婚して自由気ままに生きようと思います

プロローグ 初恋の相手でした

雲ひとつない爽やかな快晴の早朝。

抜けるような清々しい青空とは裏腹に、夫であるルートヴィヒ様を屋敷の前で見送る私——クリス・レーンクヴィストの背中には使用人たちからの侮蔑の混じった視線に射抜かれていた。

「ルートヴィヒ様、いつてらっ」

言い終わらないうちにバタンと閉められた魔獣車の扉。彼は私を一瞥もせず、手元の書類に目を落とした。ちらつと、彼の従者が申し訳なさそうに会釈をする姿が視界に入る。

私は頭を下げたまま、八本脚の馬が引く魔獣車がガラガラと遠ざかる音をびくりともせず見送った。

いや、正確に言うとは動くことができなかったのだ。

……今日もルートヴィヒ様は目も合わせてくださらなかったという落胆、自責、恥辱。

一体、私の何が彼の機嫌を損ねてしまうのだろう。

きつと私はひどい顔をしている。今すぐここで泣き出してしまいたいし、どうして私を見ようとしてくれないのか、みつともなく喚き散らしてしまいたい。

だけどそのどれも伯爵家に嫁いだ私がするべき行動ではないと知っている。

後ろには使用人たちも控えているのだ。

いつものように嵐の吹き荒れたような心を整え、ふうつと小さく息を吐く。

そして、何事もなかったかのようにゆつくりと顔を上げた。

主を見送るや否や、屋敷へと向かう執事や男性使用人たちの背中に続こうとしたのだけれど、今日もタイミング悪く女性の使用人たちに取り囲まれる。

ああ、また今日もか、という暗澹とした気持ちになった。

古参の使用人たちから心ない嫌味を投げかけられるのはいつものこと。だけど、ほとんどの時間を大好きな本を読んで過ごせるのだから、少しでも我慢しようと視線を落とす。顔には出さないように気をつけながら、私はぐつと奥歯を噛み締めた。

口火を切ったのはメイド長のオパールだ。三十歳前後の彼女がこの家で持つ権力は、私よりほど大きい。

「まったく、空気が読めないんだから。どうせ無視されるくせに、懲りもせずお見送りにくるなんて。恥ずかしいの？」

「ほんとよ。ルートヴィヒ様、視界にも入れてなかったじゃない」

「……っ」

彼女たちの容赦ない誹謗に、構えていても力が入る。

「陰気で根暗。ぼそぼそと何を話しているのかよくわからないし、ルートヴィヒ様だって朝からそ

んな顔を見たらうんざりするわ」

……反論の余地がない。確かに、私は根暗なもの。

一人で静かに本を読む時間が好きだし、うまく自分の気持ちを伝えられなくて口ごもってしまう。そもそも、この結婚自体が間違いだったと私だってわかってる。

ルートヴィヒ様は第二魔獣騎士団の若き団長だ。

少し癖のある艶やかな漆黒の髪に、性格を表すようなキリリとした眉。高い鼻梁びりように黒曜石こくようせきのような切れ長の鋭い瞳。薄く引き締まった唇には意志の強さを感じる。

容姿端麗ようしたんれい、頭脳明晰ずのうめいせき、将来有望な伯爵家の長男は、お相手なんて選りどりみどりだったはず。それなのに、なぜか彼の妻の座に収まったのは私だった。

その私はいえ、薄灰色うすはいろにも見える銀髪に、ブルーグレーの瞳。

見た目からしてなんだかパツとしない色合いだ。髪も瞳もくすんでいて、印象自体がぼんやりしていると自分でも思う。

学園を卒業するタイミングで持ち込まれた二つ年上のルートヴィヒ様との縁談。

何かの間違いかと思っただけ、家族は大喜びで受けちゃうし、子爵家からしたら家格が侯爵家にも近いレーンクヴィスト伯爵家は格上だから断れない。そもそもこんな良縁を断る理由もない。

結果、とんとん拍子で半年後には輿入れいりいれしていたのだ。

自慢の主人であるルートヴィヒ様のお相手が私で、使用人たちは忸怩じくじたる思いをしているのだろう。私だって、こんな生活が待っていると知っていたら……

「ちよつと、奥様！ 何をぼうつと突つ立つてるんですか！」

「つ……す、すみません」

「つたく。忙しいんですから、早く食事を済ませてくださいよ」

はつとして周囲を見渡せばすでに使用人たちはいない。そりゃそうよね。日がな一日、本を読んでいる私とは違い、彼女たちは無駄話に花を咲かせているほど暇ではないのだから。

使用人たちが各々の仕事に取りかかる中、慌てて食堂へ向かい、広々とした長テーブルに一人座ったのだけ……

バタバタとせわしなく配膳される朝食、運ばれてくる皿を見て青ざめた。

「……っ」

ふんわり焼かれたパン、こんがり焦がされたベーコンに綺麗な目玉焼きが載っている。湯気が立ち上るコーンポタージュ、それに色とりどりの美しいサラダが目にも鮮やかだ。

問題はサラダのトッピングである。

くるみは食べると息が詰まるって何度も言っているのに……

「あ、あの」

「奥様あ、残さず食べてくださいよ？ 奥様のわがままで量を減らしたり内容を替えたりして厨房ちゆうぼうは散っさん、苦勞したんですから」

「す、すみません……」

「すみませんばかり！ 本当にそう思っているなら早く食べてくださいよ」

イライラが隠せないオパールに気圧される。

言いたいことはたくさんあるけど、どうせ何を言っても聞いてもらえない。重篤なアレルギー症
状を目の当たりにするまで、永遠にくるみを出されそうだ。

……そう思った私は、震える手でフォークをサラダに伸ばした。

気道が塞がれ粘膜が腫れる苦しさ、あの息苦しさがい出されて怖い。視界を滲ませながらその
欠片を口にした。

カリッとした噛み応え、喉に広がる違和感、背筋を駆けあがる不思議な感覚。

頭の中が急激にフル回転したかのように熱を持ち、その瞬間私は悟った。

——花咲さくら、二十八歳。会社帰りに、わき見運転の車にはねられ死亡。

っ、懐かしいような……、これは……もしかして私の前世……？

そう、そうだわ、……思い出した！

ブラックすぎる会社で社畜エンジニアとして働き、二徹後に朦朧としながらもふもふカフェへ癒
やされにこうとして……！

手元にあったナプキンに急いでくるみを吐き出し、水で口をゆすぐ。

少し喉が痒いが、飲み込んでいないし少量だったから大丈夫だろう。

そうそう、前世もくるみアレルギーだったわ！

わあ、日本人だった頃の文明の利器に美食、便利な生活も懐かしい。

今世は中世ヨーロッパ風の異世界？ 気弱なクラリス・レーンクヴィストも私だけど、花咲さく

らからしたらクラリスの人生はずいぶんとハードモードな気がするわ。

神様が気弱なクラリスが少しでも生きやすいように、前世の記憶を掘り起こしてくださったのか
しら。さくらはしつかり者で、どちらかといえば姐御肌なタイプだったものね。今世のクラリスと
は大違いだわ……！

うんうん。確かに、このままだと私は心身を病んでしまうところだった。それもこれも、妻に無
関心な夫のせいね。

初夜だって……

『え？ ル、ルートヴィヒ様、初夜なのに、い、一緒の部屋をお使いにならないのですか……？』

『……ああ。今日はいい』

スケスケのランジェリーを着させられ、破裂しそうな胸を抑えながら何時間も待っていた私。

冷たく見下ろしてきた大好きな夫からの一言。

夫婦の寝室に一人置き去りにされた私の心もとなさ……

いや、まじでひどくない？ 男がリードしてしかるべきなのに尻込みしてさ。この世界で初夜で
夫に抱かれることがどれほど重要なのか、知らなかったとは言わせない。シートに破瓜の痕跡がな
かったから私たちは初夜を共にしていないとバレた。それどころか、その後も致していないことが
バレバレだ。

ちゃんと義務を果たしてくれないから。

夫が妻を邪険にするから使用人たちも敬わないのだ。

そりゃあ、使用人たちだつて気弱な名ばかりの奥様に対して横柄にもなるつてもの。うら若いクラリスを放置し続けたルートヴィヒ様が悪い。

彼らのクラリスに対する些細ないじわるは枚挙にいとまがない。湯船だつてルートヴィヒ様の帰りが遅い日は水のまま。クラリスは凍えながら身を清めている。

だけど、重篤なアレルギーを知つたうえでの食事の提供……、命にかかわる仕打ちは悪質すぎる。耐え忍ぶしかないと思つていたけど、前世を思い出した今となつては離縁すればいいだけよ。こんな生活、早く抜け出さないと。

そもそもこうなつたのは、ルートヴィヒ様に愛する人がいるからなんだもの。

お相手はわかつていて。ソフィア・セーデルホルム殿下だ。

この国の第二王女であり、ルートヴィヒ様と同じ第二魔獣騎士団の団員。抜群のスタイルに王族らしい輝く金髪と海のようなターコイズブルーの瞳を携えた絶世の美女は、『国民の妹』として人氣が高い。

愛され王女と『漆黒のグリフォース』——グリフォンに騎乗する騎士の称号で、漆黒は彼の黒髪と黒瞳に由来する——の二つ名を持つルートヴィヒ様は、絵に描いたような美男美女、悲劇のカップルとして小説や演劇の題材になるほど人気なのだ。

そして私は二人の愛の障壁となる悪者で、傲慢な妻だとか。

まったく、ひどい話だ。縁談を持ち込んだのはレインクヴィスト伯爵家なのに。

伯爵家ではソフィア王女と家格が合わない。義両親はルートヴィヒ様に諦めさせようと私を身代

わりにしたのかしら。だとしたら、大失敗ね。

そう思つた瞬間、胸がずきんと痛んだ。

わかつてる。ルートヴィヒ様はクラリスの初恋の人だった。

だからこそ、身の程知らずとわかつていても、縁談の申し込みをされた時は天にも昇る気持ちだつたよね……

「……っ」

世間の冷たい風当たりを一身に受けてきたけど、それも今日で終わり。

十八歳で嫁いだ私も二十歳になった。二年も耐えた。えらい、私。

まだ二十歳。人生はこれからだと思つたら、ワクワクしてきた。

「よし。ルートヴィヒ様とは離縁して、とつとシングルライフを謳歌しましょう」

第一章 おひとり様計画始動！

……とは思ったものの、そういえば、おひとり様にはどうしたらなれるのかがわからない。前世と同じように財産分与やら離婚届やらなんやらあるのかな？ それ以前に、そもそも離縁がこの国で許されているのかも知らない。

実のところ友達がいけない弊害で、私の耳にはスキャンダルやゴシップの類いは入ってこないのだ。使用人に聞いたらず手を挙げて教えてくれそうだけど、あまり関わりたくないし。実家に手紙を書いて聞いてみようかしら。

——お父様、お母様。離縁ってどうしたらできますか？

頭に血が上り真っ赤になる父親と、目を瞬かせ気絶する母親の姿が目に見え、青ざめた。嫁ぎ先で冷遇されているなんて知ったら……！

うん。両親に尋ねるのは最終手段にしようとして一人^{うなず}頷く。ただでさえ騒がしい人たちのなかに、天地がひっくり返るような大騒ぎになってしまうことは間違いない。

それなら、久しぶりに貴族が使用できる王城図書館に行つて調べてみよう。世の中のほとんどのことは先達が残した知識が解決してくれる。

だから読書はやめられないのよ、と独り言^{ひとりごち}ちながら、部屋を出て執事を探す。

エントランスで何やら指示をしていた執事を呼び止めた。

「あの。王城に行くので魔獣車の手配をお願いします」

気弱な奥様に呼び止められるとは思わなかったのだろう。執事の肩が揺れる。

「恐れながら奥様。王城にはどのような……」

「図書館へ行くの。何か問題でも？」

「とんでもありません。それでは、正面玄関前に魔獣車をご用意してお待ちしております」

私は頷くと支度のために自室へ向かった。

あの執事、明らかに動揺していたけど、当然よね。今日の朝まで、何を言われても根暗で口ごもっていたクラリスが、突然別人のようにハキハキ話したら誰だつて驚くわ。

そういえば執事は仕事ができそうだけど、私がメイド長を筆頭に女性使用人たちから冷たく扱われていることは知らないのだろうか、とふと思う。

知らないのか、それとも知っているうえで止めないのか……

ううん、どちらにしてもこの家の使用人はみんな同じ。気づけない無能か傍観者よ。

クラリス、誰も信用しちゃだめよ、と自分に言い聞かせた。

これからでもできるだけ自分のことは自分でしなくちゃ。離縁の準備をしているなんて、使用人に知られるわけにはいかない。私に不都合な証拠や証言をでっちあげられ、実家に迷惑をかける可能性^{せい}だつてあるもの。

まあ、どっちみち身の回りの世話をしてくれる侍女もないし、日替わりでやってくるメイドも

私をぞんざいに扱うから、自分でせざるを得ないのだけど。そもそも、夜会や茶会にだって行かないから着飾る機会もないし、特に問題はない。

私は肩を疎めると、普段着用のクローゼットから着慣れたワンピースを手にとった。

選んだのは白襟に紺色の落ち着いたワンピース。地味だ。これなら目立たないだろう。

手早く身に着け、髪をアップにする。くすんでいるとはいえ、グレースルバーの髪は暗髪に混ざると目立ちやすいからコンパクトにまとめておこう。

「これでよし」

鏡の前で全身をチェックし、足早にエントランスを通って魔獣車に乗り込んだ。

ガタゴトと動き出し、レーンクヴィスト伯爵家が十分遠ざかった頃を見計らってカバンから取り出した眼鏡をかける。顔回りに小物があるだけで人はだいたい印象が変わるからね。とにかく、自然ではない程度に目立たないようにしておこう。

王城は魔獣騎士団が常駐していて、ルートヴィヒ様もソフィア王女もいる。私は国民的カップルを邪魔する悪女ですもの。下手に目立って、身に覚えのないことで陰口を叩かれるのはごめんだわ。

——ルートヴィヒを追いかけまわす悪妻

——王女とルートヴィヒの仲を邪魔しに悪妻がわざわざ王城に来た

言われかねない言葉を想像するだけでぞつとずる。

鉢合わせをすることは……ないわよね？

大丈夫。魔獣騎士団の常駐場所はちゃんと頭に入っているし、会うことはない。

私はきしむ胸を抑えながら深く息を吸いこみ、姿勢を正した。

魔獣車の外に見えるのはセーデルホルム王国の首都。ここは壮大な城と魔獣の神殿が立ち並ぶ美しい都市だ。遠くに見える広大な森林や山岳地帯は魔獣たちが自由に飛び回り、これらの地域は魔獣たちの聖域とされるとともに、自然の要塞として我が国を守護している。

古代の英雄セーデルホルム王はドラゴン、グリフォン、ヒッポグリフの三種の魔獣を従え、周囲の部族を統一。この国を建国したと伝えられている。

そして王は彼らと特別な契約を結び、魔獣の力を借りて王国を守ると誓ったのだとか。この契約は今も王家に代々受け継がれているといわれ、三種の魔獣が率いる魔獣騎士団の活躍により王国は繁栄。周囲の国々からも一目置かれる存在となっているのだ。

そう、魔獣が崇拜されるこの国では、ドラゴン、グリフォン、ヒッポグリフが神聖視され、彼らを象った神殿や祭りも多い。そして、夫であるルートヴィヒ様は第二魔獣騎士団——通称グリフォン騎士団の団長である。

レーンクヴィスト伯爵家は代々第二魔獣騎士団の団長を務めてきた家門で、ルートヴィヒ様はいわゆるサラブレッドなのだ。

騎士団に入るためには厳しい訓練が行われ、魔獣との絆を深めるための特別な教育が提供されると聞いている。そもそも魔獣と心を通わせられる者だけが魔獣騎士団への入団を許されるらしい。

レーンクヴィスト伯爵家は地方にある領地で幼い頃からグリフォンと絆を深めるとは一応教わったのだけど……私の夫はあんなに無表情で無口なのに、どうやってグリフォンと心を通わせたのか

不思議で仕方がない。もしかして、グリフォンには意外とおしゃべりだったりするのだろうか。私はその姿を想像して、小さく頭を振った。

そうこうしているうちに魔獣車が王城の門へとたどり着いた。衛兵らしき人物が入城者を厳しくチェックしている。十数分ほどで、私の順番が回ってきた。

「はい次の方。はいはい、身分証の提示を……っ！ ごほん。レディ。身分証はお持ちですか？」
「こちらを」

急にキリッとした衛兵は身分証の表裏を穴があきそうなほど確認し、「ちよつと失礼」と私の顔を何度も確認する。

詰所にいる他の衛兵も野次馬とばかりに出てきてなんだか嫌な感じがした。

「あの方が漆黒のグリフォースの……道理で」

「へえ、あの髪の色は……」

ところどころ耳に入る単語に眉を寄せる。ちらちらとカーテンの隙間から不躰に覗いてくる衛兵たち。毅然とした態度で背筋を伸ばしているものの、内心はハードチーズが少しずつ下ろされるようにすり減っていた。

「……だ、第二魔獣騎士団ルートヴィヒ・レーンクヴィスト団長の奥方様ですね。どうぞお進みください」

やっとたくさん目の目から解放され、止めていた息を吐き出す。

彼らが私の顔をしつこく眺めた気持ちもわからないでもない。愛され王女の恋敵がどんな悪女な

のか、じっくり拝みたかったのだろう。

身分証を提示するのはここだけ。中に入ってしまったえば私がルートヴィヒ様の妻だとは誰にもわからない。

……ああ、前世の記憶が戻って強気になったとはいえ、不躰な視線に晒されるのは嫌なものね。私が何をしたっていうのよ。

あまりの理不尽さに悔し涙が滲んでくる。

大丈夫、大丈夫よ、クラリス。

私は自分で自分を励まし、零れ落ちそうになる涙をぐつと堪えた。

ようやく入城を果たす。広大な敷地内には政務棟がいくつも並び、文官たちが忙しそうに行き交っていた。遠くに見える白亜の城は王宮エリアにある。舞踏会などはあちらの城へ向かうのだけど、私はデビュタント以降、足を踏み入れていない。

そして、魔獣騎士団の常駐所はここからずっと右に進んだ先に広がっている。

今頃、ルートヴィヒ様は王女殿下と一緒にいるんだろうな。

お二人が仲睦まじそうにボディタッチをしながら戯れる姿——世間的には剣術稽古ともいうのだけど——が頭に浮かび、妄想を打ち消すように頭を振った。

政務棟が立ち並びエリアまで馬車で進むと私は御者に休憩するように伝え、一路徒歩で図書館を目指す。

多くの人が出入りする図書館は国内随一の蔵書が揃う、宝の山のような場所だ。

ルートヴィヒ様と結婚してよかったことといえば、王城への入城許可証の授与だろう。

通常、入城には複雑かつ面倒な手続きがあるものの、魔獣騎士団員の家族には入城許可証が与えられているため簡単に入ることができる。

まあ、これは騎士が怪我をするとか有事を考慮した制度らしいのだけど……とにかく、今のうちにこの特権を使い倒しておこう。

お目当ての本はすぐに見つかった。各種法典や諸手続きに関する書物をいくつか棚から選び、近くの机に重ねる。パラパラと複数冊の法律を確認したところ、離縁は可能だということが判明した。しかも私は離縁できる理由に該当している！

「やった……っ」

興奮して叫びかけた口を両手で押さえる。

よかった……！ これなら簡単に離縁できる！

三年の間白い結婚なら女性側からも離縁を申請できるだなんて。あと一年乗り切ればいいのね？ そうと決まれば今後の人生設計を立てて、残り一年の間に準備を始めよう。以前だったら実家に帰って引きこもるの一択だったけど、今は違う。

離縁した女性は何身が狭い？

ふっ。前世の記憶が甦った以上、我慢に我慢を重ねる結婚生活ですり減るより、後ろ指を指されても好きなことをした方がよっぽど有意義だって知っている。

クラリスも人生を楽しまなくちゃ。さあ、どうやって今世を満喫しようかしら。ここはやっぱり……

り……

「うん。もふもふカフェを開こう！ 毎日もふもふに囲まれながらおいしいスイーツを食べられたら最高じゃない！」

そうと決まれば、さっそく帰って計画を練らなくちゃ。

ほくほく顔で図書館を後にし、馬車を停めてある場所まで歩いていく。いくつも立ち並ぶ古びた執務塔の合間を縫いながら周囲を見渡すとすべてが輝いて見えた。

ああ、楽しみがあるとこんなにも景色が違うものなのか、と一人頷く。

片隅に咲く健全な花、ベンチでうつらうつらしている疲れた中年の文官まで愛おしい。

あちこちに笑顔をふりまき、植え込みにうずくまる水色の赤ちゃんドラゴンにも微笑んだ。^{ほほえ}

「あら、かわいいドラゴンの赤ちゃん。こんにち……んん？ ド、ドラゴンの赤ちゃん!?」

「ちよっ！ な、なんでこんなところにドラゴンが……!」

キヨロキヨロと周りを見渡してみるも、魔獣騎士団員の姿はない。ひよっとして抜け出して来ちゃったの？

魔獣舎からはかなりの距離が……と思ったけど、この子たちには大した距離じゃなかった、と思い直す。

そっと近づくと、水色の赤ちゃんドラゴンは私を上目遣いで見上げた。

鱗に覆われた大型の爬虫類^{はちゅうい}のような体にコウモリのような翼がある。鋭い牙に長い尾、鋭利な



爪がドラゴンの特徴なのだけど……。どのパーツもまだまだ丸みがあってかわいい。けどドラゴンは火を吐く魔獣だ。赤ちゃんといえど暴れたりでもしたら、文官ばかりの執務塔エリアは大混乱に陥るだろう。

すぐ隣にしゃがみ、近くで見ると鱗は柔らかそうだ。本当に赤ちゃんのようだけど、前世の柴犬ほどの大きさはある。

「どうしてこんなところにいるの？ おうちがわからなくなっちゃった？」

きゅるるんと見上げてくるつぶらな瞳。

うっ、かわいい……！

っと、こうしている場合じゃない。魔獣騎士団員を探しにいくべきか、誰か人を呼ぶべきか……。きつと誰かがこの子を探しているはずだわ。

「ちよつと待っててね。誰か呼んでくるわ」

「ギャアッ！」

「あっ！ だ、だめよ、スカートを嘔まないで！ ああ、袖ならいいってわけではなくて……！ ううっ、わかったわ。私が一緒にいてあげる。送ってあげるから、ね？」

その言葉に赤ちゃんドラゴンはうれしそうに立ち上がった。

……ルートヴィヒ様に会いたくないけど、仕方がない。

私はなぜか昔から魔獣によく懐かれる。気弱で無害だって滲み出ているのかしら。

まあ、嫌われるよりはいいわよね。

赤ちゃんドラゴンは私について来いともいうように先導を始める。

あれ、一人で戻るんじゃない？　と思つて立ち止まると、スカートを引っ張ってくる。この、寂しんぼさんめ。

「へえ。こんな道があつたんだ。ここを通ると魔獣騎士団のいる場所も近いわね」

どうやら地図上にない裏道を通っているようだ。

ひとけのないルートは目立ちたくない私にとつては僥倖^{きやうしやう}。

頭の中にある王城の地図を書き替えながら、魔獣舎に近づいていく。私は楽しそうに尻尾を振つて歩くドラゴンに躊躇^{ためら}いながら話しかけた。

「あなたのこと、ドラちゃんと呼んでいいかしら？　ドラちゃん……私ね、ルートヴィヒ・レーンクヴィストの妻なの。知ってる？　漆黒のグリフォースって呼ばれている人」

「ギアアッ！」

「私の夫、王女様とよく一緒にいるでしょう？　二人は王国の理想のカップルなんですつて。世間で私は悪者なの。でね。……二人が一緒にいるところ、見たくないの。だから、魔獣舎の手前で帰るね？」

「ギア……」

「ふふつ、慰めてくれるの？　ありがとね」

なんとなく同情された気がした。

ルートヴィヒ様との冷え切った関係に寄り添つてくれたのは、この子が初めてかも……

ドラちゃんを送つてよかったな、と思つていると魔獣舎の建物が見えてきた。

「ふう。四十分くらい歩いた？　思いがけずいい運動になったわ。それじゃあね、ドラちゃん」

「ギアアッ」

「ええ？　ここまでつて約束したじゃない。ド、ドラちゃん……」

ドラちゃんは私の服をぐいぐいと引っ張つてどこかに連れていきたい様子だ。困つたなと思つたけど、ドラちゃんは頑固で諦めようとしなない。

目の前には巨大な倉庫のような魔獣舎がそびえ立つ。

……仕方がない。周囲を警戒しながら魔獣舎の中に入ると、色とりどりのドラゴンたちが一斉にこちらを向いた。

「わあ、圧巻ね……」

どうやらここはドラゴンの魔獣舎のようだ。左右一列に仕切られた部屋からドラゴンたちが顔を出し、私を見つめる。

赤ちゃんドラゴンはひとときわ「ガアア——！」と騒ぐ真つ青なドラゴンの元へ駆け寄る。雰囲気からこの子のお母さんのような気がした。

「えっと……。迷子のドラちゃんを連れてきただけなので、失礼します」

「ギアオオオ——！　ギアオオオ——！」

お母さんドラゴンが謎の大騒ぎ。賑やかな魔獣舎の様子が気になったのか、第一魔獣騎士団員がぞろぞろとやってきてしまった。

ああ……なんてこと……

「っ！ ど、どちら様ですか？」

騎士の一人が私に気づき、慌てて問い質す。
そうなるわよね。

「……通りすがりに水色の赤ちゃんドラゴンを保護した者です。図書館の近くで迷子になっていた
ので連れてきました。では、これで失礼します」

「グオオオオ——！」

「ちょ、ちよつと、お待ちくださいっ！」

「わあ、なんてうつく……」

「ガアアア——ッ！」

お母さんドラゴンの叫び声に騎士たちの声が入り混じる。

カ、カオスだ……

「おらっ、みんな静まれ」

低いバリトンボイスが響き渡ると、団員だけでなくドラゴンまで一瞬で静かになった。大声では
ないのに腹の奥にズンと響くような不思議な声。

「アロルド団長！」

アロルド団長……ってことは、第一魔獣騎士団の団長さん？

そこに現れたのは赤みがかった茶髪に金瞳、無精ひげのイケおじだ。魔獣騎士団の制服を着崩し、

シャツの間からはマッチョな胸筋が……！ はわわ。

どう見てもモテ男のアロルドがくしゃくしゃの髪をかき上げながら近づいてきた。

「アロルド・エードルドだ。君があの子を連れてきてくれたんだって？ 悪かったな」

男の色気ムンムンのアロルドは三十半ばを過ぎた頃だろうか。

渋みがいい感じに出ていますね。前世オジサマ好きだった花咲さくらのにたまりません。

「いえ、大丈夫です。それではこれで……」

「執務塔の方から来たんだろう？ 歩くには距離もあるし、魔獣車で送らせるよ」

確かに。これ以上歩くと明日は筋肉痛で動けなくなりそう。それなら、ここは素直に甘えてお
こう。

「では、よろしく願います……」

赤ちゃんドラゴンにお別れをし、手配してくれるという魔獣車の元へ向かう。アロルド団長の後
に続きながら、魔獣騎士団専用の訓練用グラウンド沿いを歩いている時だった。

土煙が舞う広大なグラウンドに大きな塊がいくつか見えた。その姿形を認識し、心臓がぎゅうつ
と締め付けられる。遠い昔、夫の勇姿を見にパレードを見学した以来だ。

「グリフォン……」

「ん？ ああ。この時間帯、ここは第二魔獣騎士団が使用するんだ」

「あ……」

ルートヴィヒ様だ。黒髪をなびかせグリフォンから降りた彼。すりすりとは相棒らしきグリフォン

の首の辺りを撫でている。

その隣には並走していたグリフォンから降りたソフィア王女が佇む。

二人は向き合って何か話しているようだけど、私は読唇術もできないし、ここからじゃとてもじゃないけどわからない。でも、なんだか仲がよさそうなのはわかる。

そのうち、背を向けて歩き出したルートヴィヒ様の背中にソフィア王女が飛びついた。

まるでおんぶをせがむような、恋人たちのイチヤイチャタイムというような。

誰がどう見ても恋人同士というような。

「っ！」

思わず顔を背けてしまった。こういう想像はたくさんしてきたけど、実際に見るのは初めてだ。両手の拳で思いつき胸を叩かれたように痛い。

ああ、王城になんて来るんじゃないかなったという後悔と、実際に見て吹っ切れたでしょう？ という諦念がせめぎ合う。

目を伏せると、アロルド団長がバリトンボイスで私の耳元にささやいた。

「グリフォンたちが君のことを気にしているね」

「……え？」

恐る恐るグラウンドに目を向けると、確かにグリフォンたちが一斉にこちらを見ている気がする。だけど、私じゃなくてアロルド団長を見ているのでは？

「いやいや、……ふくん、そうか……。まあ、いい。ああ、レディ、こちら側へ。私が視界を遮り

ましょう」

「っ！ あ、ありがとうございます」

なんて気が利く方なのかしら……！

アロルド団長は私が名乗らなかったことで何かを察したのか、最後まで素性を尋ねなかった。やっぱりモテるイケおじはスマートだし、距離感が抜群にいいのよね。

——そんなこんなで帰宅した私だったのだけど。

珍しく夕食の席に現れたルートヴィヒ様はすこぶる不機嫌だった。

「……今日は王城へ何をしに？」

話しかけられるなんて、何か月ぶりだろう。

「調べ物があつて図書館へ行きました」

「むやみやたらに男と接するのは感心しない。……かわいい君を瞳に映す男は俺だけでいい」

「え……？」

後半は小声すぎて聞こえなかったけど、まるで王城に行つて男漁りをしていたような言われっぷりに目を瞬かせた。

そういうルートヴィヒ様こそ、ずいぶん王女様と距離が近かったようですが……？

ご存じないでしょうけど、あなたが王女といちゃいちゃしているところ、私この目で見ましたよ？

麗しい黒瞳がじつと私を見つめてくる。普段視界に入れようともしないくせに、こんな時だけはそんな風に私を見つめるのね。クラリスの恋心がちくつと痛んだ気がした。

……残念ながら男性とむやみやたらに接触はしていません。濡れ衣、反対。だけど、反論する気力もない。だって、もう決めつけているんでしょう？
不毛な会話を続けてこれ以上嫌われるのもつらすぎる。

「……以後、気をつけます」

「……ああ」

ルートヴィヒ・レーンクヴィストの妻として、悪評を立てるなどでも釘を刺したかったのかしら。残念ながらルートヴィヒ様と王女様を邪魔する悪女としてすでに有名なんですが？

ああ、それとも、もし事実なら王女殿下と一緒にになれるいい口実だと思ったのかな。その後の食事は会話もなく、一人で食べるのと変わらない静かな夕食だった。

それにしても王城へ行つたと誰から聞いたんだろう。執事？ 身分証を提示したから、衛兵の詰所経由で連絡がいったのかしら。

まあ……、どっちでもいっつか。

「さあ。明日から忙しくなるわ。早く寝なくっちゃ」

翌日。いつもの朝が始まった。

ひとつ違いがあるとすれば、お見送り隊の最前列に私がないことだ。

ルートヴィヒ様を見送るために屋敷の前に整列する使用人たち。大型の魔獣車の中で、夫は今日も書類を眺めているだろう。……見送りの中に妻がいなくても気づかずに。

私は自室の窓から、屋敷の前の仰々しいお見送りを見下ろしていた。

「いつてらっしゃいませ」も言わせてくれない夫。

空気を読んで来るなと言うメイドたち。

奥様へのいじめを見て見ぬふりをするその他の使用人たち。

いやいやいや、どう考えたって見送りする必要なんてないでしょう。

朝食もやめておこう。ここぞとばかりにくるみが入っていそうなもの。街に出れば軽食を売る屋台があるし、今日は偵察がてら行ってみよう。

となると、先立つものが必要だ。

奥様用の品位維持費があるはずだけど、その管理はメイド長のオパールが行っている。

つまり、私の自由になるお金がない。

「……手持ちの何かを売ってお金を作るしかないわね」

売れそうなものといえば、やっぱりドレスかな。今世、貴族が服をリサイクルするなんて発想はないし、せいぜい寄付が関の山。

だけど買ってくれる店があることを私は知っている。書物から得た知識だけど、ドレスを買ってリメイクをしたり、バラバラにして平民向けの服に仕立て直したりするそう。

とはいえ、貴族の奥様がドレスを売っているなんてバレたら、「家計が厳しいのかしら」なんて

陰口を叩かれてしまう。周りまわってルートヴィヒ様の耳に入るのもめんどくさくなりそう。つまり、内緒で売らないといけない。

私は普段使っていない方のクローゼットを開け、ため息をついた。

「オーダーメイドで作ったはずなのに……私のクローゼットの中がひどすぎる」

普段着用のワンピースは実家から持ってきたもので、結婚後に増えたドレスやワンピースは私に全く似合わないものばかりだ。

胸元が大きく開いた深紅のドレスなんて、ぼんやりした色合いの私では着こなせない。

それにフリルとリボンをたっぷり使ったピンク色のドレスも私には似合わないし、好みじゃない。そもそも、ここにあるドレスはどれひとつ選んだことがないのだけけど？

きつとオパールの好みだわ。

いずれ「奥様に下げ渡された」とでも言って、メイドたちで分け合うつもりなのね。

「まったく、やりたい放題にも程がある」

まあ、そのうち業者を呼んですべて処分しましょう。

今日は持ち運びやすい宝石をいくつか換金すればいい。

宝石箱を開けて中身を確認すると、こちらはさすがに手を付けられていないようだ。

ルートヴィヒ様からいただいたのは婚約と結婚の際に贈られたダイヤモンドのイヤリングにネックレス……くらいか。さすがにそれを売るのは心苦しい。

私は実家から持ってきた宝石をいくつか袋に入れることにした。

レーンクヴィスト家から魔獣車に向かってたけれど、最悪な態度の御者は魔獣車を停めて私が降りる際、手を貸そうとしなかった。

今朝、ルートヴィヒ様をお見送りしなかったことで使用人たちの視線にはいろいろな感情が載っていたが、この御者は私に敵意を持った様子だ。帰りは乗り合いを使うからいいと伝えたと、喜んで帰っていった。

「まったく、呆れちゃうわね。だけど一人の方が動きやすいからいいわ」

まずは質店探しからだ。看板を頼りに案外すんなり店を特定でき、宝石を売るとそこそこのお金になった。やったね！

もふもふカフェのオープンにはどのくらいお金がかかるかしら。

というより、どこにももふもふカフェがないかしら。

前世、限界社畜だった花咲さくらの唯一の楽しみといえばもふもふと戯れることだった。睡眠不足も、ぼんこつ上司のわけのわからんブッキング受注も、友達も彼氏もない寂しさも、すべてを優しく包み込んでくれる存在——それがもふもふ。

クラリスのストレスはすでに極限状態を超えている。

癒やしがなければやってられないわっ……！

商店が軒を連ねる通りをキョロキョロ見渡しながら歩いてみるも、それらしきお店はない。よく見ると散歩中のわんちゃんもないし、野良ねこちゃんもない。

「どこ……？ どこにももふもふがいるの……？」

ふらふらと歩いていたら、道に迷ったご婦人とも思われたのだろうか。二人組の衛兵が声をかけてきた。

「あの……ご令嬢がお一人で出歩かれては危ないですよ……？　どうかされましたか？」

あ、そっか。貴族の女性は侍女やら護衛やら連れているものよね。花咲さくらの感覚でいたけど、クラリスが一人で歩いていたら異質なのか。

だけどついて来てくれる人がレーンクヴィスト伯爵家にはいないし仕方がない。

「あ……、ちょっと探しているお店があつて……」

「っ！　ど、どんなお店ですか!?　もしよろしければ私めがご案内いたしますよ？」

「ほんとですか！」

やった！　この人たち、おまわりさんみたいなものよね。それなら安心だわ。

「あの、もふもふカフェに行きたいんです」

「もふもふ……？」

こてんと首を傾げられてしまった。

あれ？　伝わらない？

一緒になつてこてんと首を傾げてしまう。

「えっと、もふもふというのは、犬とか猫とか毛がふわふわした動物を指していて、私が探しているのはその動物と一緒に戯れることができるカフェとかサロンなんです……」

「イヌやネコ……？」

「もふもふ……？」

衛兵たちが顔を見合わせる。

え、まさか、この世界には犬も猫もないの？　ノーもふもふ!?

ううん、クラリスの記憶が動物図鑑で犬も猫も見たことを覚えている。

そのうち、一人の衛兵が「深窓の令嬢なのか？」と呟き、気の毒そうな目で私を見下ろしてきた。

「ごほん。あのですね、王都は三大魔獣がいるため、一般動物は怖がつて寄り付かないのです。ご存じありませんでしたか？」

「……え？」

「ドラゴン、グリフォン、ヒップグリフは最上位の魔獣です。彼らは普段王城にいますが、王都内を巡回することもあります。ああ、ほら。ちょうどヒップグリフ騎士団があそこに」

彼が指さす方向を見ると、ヒップグリフに跨がった第三魔獣騎士団が隊列を組んで歩いているところだった。

馬よりも二回りほど大きな体。後脚は馬のようだけど上半身は鷲のような姿だ。鋭いくちばしに鋭い爪。翼は折りたたまれているけど、あれを広げたらかなりの大きさになるだろう。

魔獣騎士団は空を飛んでいるイメージが強かったけど、地上を歩いていることもあるのね、なんて思いながら遠目に眺める。それよりもだ。

「動物が寄り付かない……？」

「ええ。だから王都は馬車ではなく、八本脚の馬が引く魔獣車が走っているんですよ」

聞けば、以前個人的に飼育している貴族はいたけれど、魔獣に驚いて逃げ出すなどトラブルが多かったことから、今では飼う人もほとんどいなくなったのだとか。

というわけで、王都にはもふもふカフェどころか、もふもふ自体もないに等しい状況らしい。なんてこと……！

衛兵いわく、領地では飼っている人が多いから地方に行けばもふもふがいるだろうとのこと。つまり、もふもふカフェを開くなら地方での営業が正解らしい。

それなら実家の領地の片隅がいかしら。出戻ったとしても両親は喜んでくれるだろうし、甥っ子や姪っ子が遊びに来てくれたら、もふもふと幼児の戯れが目の前で見られる……！ はわわ。想像しただけで至福の光景だわ。

私は衛兵たちにお礼を言ってお別れし、もう少し歩くことにした。せっかくここまで来たし、もふもふカフェはなくてもカフェで休憩くらいして帰りたい。家はそんなに早く帰りたい場所でもないしね。

おしゃれなスイーツ店……は女性客が多いから白い目で見られそう。王女殿下とルートヴィヒ様の仲を切り裂く悪女として、どこに行っても風当たりがきつい。

はあ、クラリスやクラリス。こんな状況、よくぞ今まで耐えてきたわね。

これからは蹴散らしてやりましょうね、とも思ってたけど、やっぱり関わらないのが一番。無駄に労力を割くよりも、もふもふカフェのオープンに向けて計画を立てた方が絶対に楽しい。

「あら。シンプルで落着けそうなお店。ここに入ろっと」

看板には『星霜の酒亭』の文字。

レンガ造りの多い建物の中でふんだんに木を使ったレトロな外観がいい。なんだか落ち着きそう。ぱつと目についたその店に入ると、中にいた胡乱な目つきの客たちがちらっと私を見て二度見した。

……あれ？ こっつてもしかしてカフェじゃない……？

ゆっくり視線を動かすと、広々とした空間には四人がけの円卓が十個ほど置かれているほか、バーカウンター席があった。ホールは二階まで吹き抜けているからすごく広く感じる。

壁際に目をやると二階へつながる階段があつて、上の階にも個室がいくつかあるみたい。飲食店？ それとも宿？

店選びを間違えたかしら、と思ったけど、マスターがいるバーカウンターにひとまず座ってみた。

「……何にしますか」

「あの……実はこういうところ、初めてで。こっつてどういうお店なんですか……？」

小声で尋ねてみると、がたいのいいコワモテマスターの眉がぴくりと動く。

食堂だったらまだセーフなんだけど、まずい店じゃないよね！

マスターは隅にいる客たちにちらりと目をやると声を潜めた。

「一階は酒場。二階は連れ込み部屋。お嬢さんには刺激的な店だな」

「まあ。娼館ってこと？」

「……お嬢さん、ここは娼館じゃあないぜ。勘違いしてもらっちゃあ困るな。ほら、あつちに女性がいるだろう？ 男に酌をして気に入られたら、お話し合いをして上の部屋を借りるんだよ」

「なるほど。幹旋^{あつせん}をしているんじゃないくて、あくまでも場所を提供しているだけってことなのね」
私の言葉にマスターが片眉を上げ、にやりと笑う。

「まあ、そういうことだ。つまり、酒も飲めないようなお嬢さんが来るようなとこじゃねえってこと」

「あら。ここに来る女性はみんなお話し合いをしなくちゃいけないの？」

マスターはいいや、と肩を竦めた。

じゃあ、バーの感覚でいいってことよね。

それはつまり社畜会社員の憧れ、昼飲みができるってこと……？

「……飲んじゃおう」

うん、もう怖いものなしだわ。貴族の奥様が真っ昼間っから酒場で飲むなんてありえない？

いやいやいや、奥様扱いされてないうえに、世間からはこれ以上ないほど悪評を立てられている。ひとつくらい増えても大差ないわよ。たまには飲まなきゃやってられない。

「じゃあ、お酒ください。一番高いやつ」

お金なら今いっぱい持つてる。離婚に向けたこれからの門出を祝って、先に乾杯しようじゃないの。景気つけよ、景気つけ。

「……」

一瞬間まったマスターはおもむろに後ろの棚からひとつのボトルを掴むと、グラスに注ぎ、私の目の前にすつと差し出した。

そういえば、クラリスってお酒飲むのは初めてな気がする。さくらは酒豪だったなあ。

前世を思い出してしみじみしながら、琥珀^{こはく}色の液体を目の前にかざし口をつける。

喉を通るお酒が焼けるように熱かった。

次の瞬間、目がかつと見開く。

「っ！ おいっしっ！」

「……イケる口なのか」

「これ、ウイスキーに似ているなあ。うふふ」

機嫌よく三杯目のグラスを片手に、にまにましながら飲んでいたら、聞き覚えのある声が高い位置から聞こえた。

「なんだか楽しそうだな」

「んんん？」

振り返ると、階段から降りてくる色気ムンムンのイケオジがいた。はだけた白シャツにトラウザーズのラフな姿なのに、醸し出す空気が艶っぽい。

「あれえ？ アロルド団ちよ、こんにちは」

「ご機嫌なお嬢さん、隣に座っても？」

「はい、どうぞ」

……ん？ アロルド団長に続いて降りてくる女性は団長とお話し合いをして、そ・う・い・う・こ・と・をし・てきたのかな。上気したとろけるような顔に覚束ない足元。あらあら。

お姉さんは団長に隣の席を薦められたけど、私は腰がだるいから帰るわとアロルド団長の背中をすっと人差し指で撫でて帰っていった。

わお、私の顔が熱くなるわ！

私の隣に座った団長が頬杖をつき、赤くなった私の顔を覗き込む。

「それで？　ずいぶん度数の高いお酒を飲んでいるみたいだな」

「うん、あたしい、お金いっぱい持つてるから高いお酒頼んだの」

自分の宝石を売ったお金だもん、誰にも文句は言わせないわ。強いていえば、私の両親。だけど、あの人たちならきつと許してくれるわ。

「高いんじゃないって強いんじゃない？」

団長がじろつと視線を送る先にはマスター。

マスターは視線を泳がせた気がするけど、彼は悪くないよ？　高いお酒をオーダー通りに出してくれたもの。

ため息をつきながら、アロルド団長が私に尋ねた。

「で、君はこんなところで飲んでいていいのか？」

「いいのいいの。あたしのことなんて、誰も待っていないし」

「ん？　結婚してるだろう？」

「けっこう？」

ぎゅつと眉を寄せてアロルド団長を見つめると「ん？」と微笑まれた。

イケオジめー！

「はんっ！　あんなのけっこうって言わないわっ！　……あたしのこと、あの人は空気にしか思っ
てないのよっ」

「ルートヴィヒが？　そんなはずは……」

眉間にしわを寄せる団長。

……ん？　それより今、ルートヴィヒって言った？

あ……その表情は私のことも知ってたんだ。

「……っ」

てつきり、私のことは知らないと思ってた。だから気さくに話しかけてくれるんだって思ってた
のに……。そうだよ、この王都でお二人の噂を知らない人なんていない。

ちらつとアロルド団長を見ると、彼は「どうした？」と優しく首を傾げた。

……急に恥ずかしさといったたまれなさに包まれる。だって、私に向けられる目に悪意が含まれて
いないんだもの。やめて、そんな優しい目で見られたら気が緩んじゃう。

「……うふ。知ってる？　私って、夫と王女様の仲を邪魔する悪妻なんだよ？」

あ、やばい。涙が出そう。普段ならこの場からさつと立ち去るのに、そうしなかったのはお酒と
目の前のイケオジの包容力のせい。

それに、なんとなく口が固そうで見守るような視線を送ってくるマスターに安心してしまったか
らかも。

「うつ……、あの人が、結婚してくれて言ったくせに……あたし、身代わりにされて、悪者にされて……」

もうダメだ。ぽろぽろと涙がこぼれた。

「……かわいそうに。たくさん傷ついたんだな」

「傷つくどころか、……あたし、レーンクヴィスト家で殺されかけたんですよ」

「……なんだって？」

「聞いてくださいよお」

積もり積もった愚痴が堰^{せき}を切ったように溢^{あふ}れ出す。

使用人からの扱い、ルートヴィヒ様の冷たい態度、挙句の果てにいつまでも出されるくるみの話。

「あたしが、何をしたって言うのよお……」

さりげなく差し出されたハンカチで涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を拭いた。

……いいにおい。イケオジのハンカチはいいにおい。

思いの丈を吐き出したら、想像以上にすっきり。

「ぐすつ、だけでもいいの。あたし、後一年したら白い結婚で離縁できるんだあ。えへへ」

「おっ？ 離縁するのか？」

「はい！ 離縁したらあ、実家の領地の隅っこで、もふもふカフェを開いてえ、動物と子どもが戯れる姿を眺めて——」

「ほう！ クラリス嬢、願ってもない！」

ぐつと顔を寄せられるとイケオジの顔が間近に迫った。僥倖です。

「ん？ 何がです？」

「動物が好きなんだろう？ かわいい動物のお世話係を探しているんだけど、やってみないか？」
かわいい動物？ もふもふが王都にいるの？

カフェをオープンするための軍資金も稼ぎたいけど、貴族の夫人が外で働くのはハードルが高い。
仕事を見つけるのも一苦労だなと思っていたのに、もふもふと働けるなんて断る理由がないじゃない。

「やる！ やります！」

「よかった。なかなか人手が見つからなくて。それじゃあ、来られる日からこの間のドラゴンの獣舎でよろしく」

「ん？ ドラゴンの獣舎？」

「そ、ドラゴン。この間の水色の子ドラゴン、君によく懐いてたようだし、適任が見つかって本当によかった」

「……へ？」

ドラちゃんのお世話係ってこと？

そりゃ、ドラちゃんはかわいいけど、ドラちゃんもふもふじゃない……

それにあそこで仕事するってことは、どう考えたってルートヴィヒ様に会いそうな気がするんですが？

私の心配を見抜いているのか、アロルド団長は問題ないと言う。
いや、あるよ！

「大丈夫。偽名を用意して、かつらと眼鏡を使えばルートヴィヒにもバレないさ。どう？」

……バレない、かなあ。アロルド団長が協力してくれるんだったら、いけるかも？

どっちみちお金を稼ぎたいし、よくわからないところで働いて危ない目に遭うよりいいかな？
平和な日本育ち、今世は箱入り娘だったクラリスは、なんだかんだいってこの世界の街の様子がよくわからないし、安心できる職場は重要だ。

冷遇するくせに口うるさいレーンクヴィスト家にも、「王城に行ってくる」って外出しやすいのも魅力的。

……うん、答えは一択しかないわ。

「はい、ぜひ働かせてください！」

こうしてアロルド団長と楽しく飲み、ドラゴンの話や最近の遠征の話を聞かせてもらった。

……気がついたら私は自分のベッドの上にいた。

チュンチュンと鳥のさえずる声に意識が覚醒する。

「ん……、まぶし……」

カーテンから差し込む日差しから察するに、どうみても日はすでに高い。

……あれ？ 朝なの？

寝坊したと気づいて慌てて起き上がろうとするも、ひどい頭痛に体が揺れた。

「痛たたた……！」

う……、二日酔いだ。そういうば、どうやって帰ってきたんだろう？

昨日は結局明るいうちから暗くなるまで飲んで……。まあ、無事に自分のベッドで寝ているし、ちゃんと自分の足で帰ってきたってことだよな。

のろのろと上半身を起こしたものの、体が重くてだるい。それになんだか、あちこちが筋肉痛だ。もしかして、久しぶりに街歩きをしたから!?

……クラリスさんよ。日がな一日読書漬けだったとはいえ、軟弱すぎないかい？
それにしても気怠い。二日酔いなんてさくらだった頃以来だな……

頭を押さえながら違和感に気づき、ふと自分の体を見下ろして驚いた。

「ぎゃっ！ な、なんで裸？」

片腕で胸を隠しながら、まさかと思い慌てて掛布の中を覗き込む。

……は、穿はいてた。よかった……

そういえば、夢の中で男の人に甘えていたような。

うわあ、自分からキスをねだっていなかった？

「は、破廉恥な夢っ！」

かっとなった頬を両手で包む。私ったら、欲求不満なの!?

色気ムンムンのイケオジと飲んでフェロモンにあてられたのかしら。クラリスの女の性が呼び起

こされたとか？

「……枯れてなかったのね、私」

私だってそういうことに全く興味がなかったわけじゃない。ルートヴィヒ様に嫁ぐ前に実家で性教育を受け、初夜に何をするかはきちんと学んできた。それに、これまで手にした本の中には恋愛小説も少なくない。

夫人たちが熱心に読む人気小説の中には、過激な描写をするものだって密かにある。読書好きが高じて性行為に関しては同世代の誰よりも知識があると思うし、そもそもこの手の話は前世の方がよっぽど進んでいるもの。私が密かに耳年増であることは否めない。

うつ。だからって、経験もない処女のくせにこんな妄想をするなんて恥ずかしすぎる。

「はあ、脱いだ服はどこかしら……」

部屋を見渡すと、昨日着ていたドレスがしわにならないよう椅子にかけられているのが目に入った。

コルセットやシュミーズは几帳面に畳まれ並べられているけど……酔っぱらいながらも私がちゃんと畳んだのかしら。使用人がこんなことするわけがない。

だって、あの人たちなら酔っぱらった私に頭からバケツの水を被せかねないもの。

だけど、ベッドサイドには水差しに酔い覚ましのお茶らしきものまで置いてある。

どういうこと？ 同情してくれた心優しい使用人でもあるのかしら。……まさかね。

きっと自分で厨房に行って持ってきたのだろう。後で顔を合わせたら勝手に持ち出したとネチネ

チ嫌味を言われそうだ。

「……それにしても軍人並みにきっちり畳んであるわね。私の密かな几帳面さが顔を現したとか？」

……やるじゃん、私。うん、いい風に考えておこう。

胃がムカムカして食欲はないし、熱いお湯にでも浸かりたいけど、使用人に頼むとまた文句を言われちゃうだろうな……と思ったら、ちょうどいい感じにお湯が溜まつてる！ もしかして、新しい使用人が入ったのかしら。

「気が利く子がいるのかな。私に敵意がない、いい子だったらいいなあ」

ゆっくり湯に浸かりながら、私は子ドラゴンのお世話係になる準備を楽しく考えることにした。

ルートヴィヒ Side 真綿で包むように

クラリスが目覚めたその頃、ルートヴィヒはレーンクヴィスト伯爵家の執務室にいた。

朝早くから多くの私兵を相手に鍛錬という名の下になぎ倒し、その後は執務に集中している——と見せかけて、実際には仕事は全く進んでいなかった。

「マルセロ。クラリスが目覚めたか確認してくれ」

「二十分前にも確認し……、はい、了解です」

「かよいクラリスはきつと疲れているはずだ。ゆっくり寝られるように配慮を」